

# 敬惜字紙について

—森島中良・瀧澤馬琴の敬惜字紙—

川 崎 ミチコ

## 1) はじめに

20世紀末から蒐集し始めた勸善書の一つである『玉歴鈔伝』の表紙や内表紙・裏表紙に敬惜字紙という四文字を眼にすることが度々あり、これが、筆者と敬惜字紙との出遭いであった。

更に時を同じくして出かけた台湾の台北市内及びその近郊の寺院・道観・大小の廟を訪ね、勸善書を渉獵していた折、『玉歴鈔伝』以外にも様々な勸善書を入手し、更に、その片すみにひっそりと存在する惜字炉（亭）を見、又、張志遠著『台湾的敬惜字亭』という書物や述古老人著『惜字徵驗録』を入手するに至り、敬惜字紙という、漢民族において長い歴史を持つ習俗を知ると同時に、台湾の人々にとっては、今日に至るもまだ、日常的風俗として、その生活の中に生き続けていることを体感したのであった。

この台湾における日常性を眼の当りにしたことも、筆者が敬惜字紙について、深く知りたいという思いを強くした、理由の一つである。

しかし、大陸の方を見てみると、敬惜字紙とはどのような意味を持つ習俗・風俗であるのかということ調べるための基礎的資料ともいえるべき文字資料を見出すことは難しくはないのであるが、残念なことに、今日の実生活の中にそれを見つけることはできない。新中国、つまり、中華人民共和国になってから（一説によると、中華民国となり蒋介石が表舞台に出て来てからとも言われるが）、更には、文化大革命を経た後は、敬惜字紙・敬惜字亭の類に対する文化認識も一部の人を除いて失なわれてしまったようである。

ただ、最近（21世紀も10年を過ぎたあたりから）、一つの遺跡発見というような形で敬惜字亭・敬字炉がマスコミに写真入りでとりあげられることが出て来ている。このことから、今後自国の、この習俗に眼をむける人も出て来るように思うのである。

(2)

2011年、筆者が中国社会科学院世界宗教研究所でお世話になった先生に、この敬惜字紙について伺ったところ、福建省のご出身でおいでのこの先生は、ご自身が幼なかつた頃には、敬惜字紙の習俗も、勿論惜字炉も生活の中にあり、当然眼にすることはあったが、今はないでしょうし、敬惜字紙ということを知らない若者がほとんどだと思う、とのことであつた。やはり、文字資料を中心とした考察しか方法はないのではないか、という思いを強くしたのであつた。

さて、「敬惜字紙」とは何か？ということについて、簡単に説明することにする。

敬惜字紙とは、「字紙」を「敬惜」・「愛惜」することである。

つまり、文字の記されている紙（布・陶磁器等も含む）を「敬重愛惜」することである。

具体的にその行動をとりあげてみるならば、一般的には、路上に落ちている字紙や破れてしまった貼紙等を拾い集め、汚れているものは、浄水で洗い、乾燥させてからそれらをまとめておき、一定の量となった時には、それらをまとめて燃やすといい、この燃やすために設置されたものが、敬惜字炉とか惜字亭などと呼ばれるものである。

更に、燃やした後に出た灰を集め、ある量になると、川なり海なりに流すという。

ここで、字紙の類を集めると言ったが、これは個々人が字紙を拾い集めるばかりではなく、「惜字」もしくは「惜字紙」という貼紙をした籠（字籠という）をかついで、不要の字紙を集める「お役の者」も存在している。

又、時代や地域によっては、個人ではなく、結社や善会、そしてそれらによって作られた「善堂」の決まり事として、人を雇い入れ、その任に当らせていたこともあつたという。同時に「集める」対象も、字紙の類ばかりではなく、「淫書」と呼ばれるものもその対象となり、処分されていったということである。

『顔氏家訓』治家第5にあるように、北齊時代の読書人達には、すでに「敬惜文字典籍」の風習があつたということであり、同時に、家訓書に記したということにより、子孫へ代々訓戒として伝授されていったということも判るわけであるが、中国人にとって、文字・紙、更には文字

の記された紙（字紙）というものに対する畏敬の念というものが、我々日本人の想像をはるかに越えた、大きく深いものであるように思われる。

この「敬惜字紙」という、風俗・習俗としての中国文化が、17・18世紀の江戸時代の日本へ伝来していたであろうことは、当時の日中交易における中国船舶載の品々（特に書物・文物・唐人屋敷等における中国人の習慣等々から受ける習俗も含めた形での風俗・習俗の伝来）を見ても明らかであるという点に眼を向け、本稿では、数は少ないが、この時期、瀧澤馬琴（1767-1848）の作品として現存している、《敬惜字紙小成》・《惜字雜箋》・《玉照堂遺愛字紙》や森島中良（1757-1810）の貼込作品《惜字帖》等を紹介することにより、当時の知識人の〈支那風俗〉への念を垣間見てみようと思ったのである。

## 2) 日本における敬惜字紙

明末の高僧雲棲株宏（1532-1615）に依って、万歴32年に公刊された『自知録』という、仏教の立場に基づいて功過格について記された書物がある。

この書物は、元禄14年、忍徴（1645-1711）によって翻訳され、更には寛政12年には再版されている。この書の上巻雑善の条に惜字紙についての記事がある。

収集した字紙を焚やす惜字炉についてみると、長崎県長崎市玉園町3番77号聖福寺域内にある惜字亭は、1866年、中国人信徒によって築造寄進されたという。現在は、市の指定有形文化財となっているという。もう一つは、大阪府大阪市天王寺区勝山の清寿院境内にある惜字炉である。この惜字炉は明治20年（1887）に中国人信者の寄進によって建立されたもので、一辺約70cmの六角形の炉である。

阪神大震災による倒壊後の修復で、背面を除く5面に設置されていた陰刻銘を持つ砂岩製の石版は、剥落が進んでいるため、修復した炉とは別に保管することになったという。現在は指定民俗文化財（有形民俗文化財）となっている。

更に、長谷部幽蹊「惜字紙の俗とその流伝」（『黄檗文草』第130号・黄檗山東福寺文庫殿黄檗文化研究所・2009年10月・頁9上）に依ると、

長崎市内では聖福寺以外に、4つの惜字炉があったという。市内館

(4)

内町2番地在・福德正神に祀る土神堂内、門を入ると右手に六角形の金庫と呼ばれた惜字炉があったという。

同じく館内12番地に在った天上聖母を祀る天后堂のそれ、半円形の泮池の北に堂があり、堂から池に向かって左手に赤煉瓦の金庫が存したという。

館内21番地には陳氏所建の福建会館（旧八閩館）があり、その正面に天后堂があり、堂の左手に金庫が存したという。

四つ目は市内新地町の観音堂に在ったそれである。

とある。

次に、18世紀半ばから19世紀半ばすぎに活躍した二人の日本人の残した敬惜字紙に関する資料を見てみることにする。

この二人とは、一人は森島中良（1754又は1756-1810）であり、もう一人は瀧澤馬琴（1767-1848）である。

森島中良は、桂川国瑞の弟で、医者・蘭学者としてのみならず、異国文化にも造詣が深く、更には、「二世風来山人」という号を有する戯作者としても著名な存在である。中良は号である。

彼の作成した『惜字帖』2冊は、文化元年に刊行されており、その大きさは縦約27cm・横約22.6cmの紙本彩色の冊子本形態のものである。

上下両巻合わせて258件の諸々雑多なものが貼り込まれている。

多くは、長崎に舶載された品々の商標・広告・色装紙等々であるが、葉の功能書・礼状・拓本等々であるが、中でも筆者の眼を引いたものが二点ある。

一つは、「清商施印」と右肩上に墨書きされた「敬惜字」という表題のついた一枚の木版刷り文書である。

これは、匡郭の中に収められた尾部脱落の残存行数28行、1行22字の木版刷りの施印文書である。

そしてもう一つは、第252番目に貼り込まれている「山男（ヲランウータンの図）」である。

この図は、彩色された<ヲランウータン>の図に賛が附されたものであり、なかなか美しく彩色され、緻密に描かれているものである。

又、もう一人は、ほぼ同時代に活躍していた瀧澤馬琴である。

この瀧澤馬琴も、「敬惜字紙」という考え方を基底として作成したと

思われるものを三点（『敬惜字紙小成』・『惜字雜箋』・『玉照堂遺愛字紙』の3種）あげることにする。

（1）『敬惜字紙小成』

上・下2巻（2冊）卷子装・写本・拓本等々の貼込。制作年は不詳。この『敬惜字紙小成』に貼込まれているものを次にあげておく。

上巻には

- 1) 関思亮三行書拓本
- 2) 安井金毘羅大権現鎮座
- 3) 著作堂馬琴書

— 2) 3) は共に拓本であり、この2つが並べて貼込まれている。

- 4) 心経（安忍天保四年写の識語有り、拓本）
- 5) 著作堂（東洲左潤の署名有り）扁額稿
- 6) 著作堂（陸□の署名有り）扁額稿
- 7) 曲亭（嘉慶十年□月／□□陳景山の識語有り）扁額稿
- 8) 蓑笠隱居（杏花園書の署名有り）扁額稿
- 9) 拓本（丁亥冬十二月／僧勤勵拜□の識語有り）
- 10) 拓本（八言句對聯を對にせず、続けて貼込んでいる）

以上10点が上巻に貼り込まれている。

下巻には

1) 拓本（仁齋書という署名と大字四文字一行書の右側に細字二行の仁井田好古の文政七年の紀年のある賛有り）

2) 木版色刷「忠孝」二文字（右側に、「寛政五年癸丑十一月五日甲未押書之／左近少将源定信」という識語有り）

- 3) 木版本（江川義啓の三行書）
- 4) 木版の判じ絵
- 5) 拓本（関羽二行書）
- 6) 五言二句二行書（行年七十歳源和賢書という識語有り）
- 7) 蒲生君蔵墓表拓本
- 8) 拓本（関思亮書／瀧澤興絶／承管。杉本山雷□という四行にわたる識語有り）
- 9) 滝沢氏祖先夫妻墓碑文拓本二枚（極めて小さいものである）

(6)

10) 拓本(娥眉山下橋の五文字のみ有り)

以上10点が下巻に貼込まれている。

(2) 『惜字雜箋』全6冊

乾・坤・春・夏・秋・冬の6冊に分けて各冊題簽に記されている。馬琴編。馬琴の自筆写本。冊子本形体。

享和二年一天保九年(1802-1838)に制作。

この『惜字雜箋』については、息子の嫁であった路(みち・1806-1858・瀧澤路)の日記、『路女日記』(木村三四吾編校・八木書店・1994)の嘉永二-五年の部分に、

嘉永四年二月廿五日辛午 雨  
一夕七時過松村氏被參、過日貸進之  
兎園別集壹冊、被返之。  
尚又所望二付、異聞雜稿壹冊。惜字  
雜式四冊貸進ス。暮時被歸去。

とある。

このことから見ても、馬琴の所へ「惜字雜箋」だけではなく、様々な書を借りに来る者が頻繁であったということがと推測できる。

『惜字雜箋』に記載されているものについて紹介することにする。

第1冊『惜字雜箋 乾』

1) 「論蜀解鋼」(第1葉右～第11葉左)

全文漢字文である。「瀧澤文庫」の長方朱印の押捺有り。又、下方象鼻下に「著作堂藏」と有る。

第11葉左に「文化十二年乙亥十一月三日起草至同月十日脱藁」とある。

2) 「桃燈考」(第12葉右～第19葉右)

漢字平仮名混り文。漢字の中に片仮名でルビを附すもの有り。第19葉右に細字で「癸酉夏五月十六日 解藏」の10文字有り。

3) 「草市」(第21葉右～第24葉左)

わずかに漢字の混る平仮名で記述。

4) 「天王祭」(第25葉右～第27葉右)

わずかに漢字の混る平仮名で記述。

## 5) 「吹葦祭」(第27葉左～第28葉左)

わずかに漢字の混る平仮名で記述。

## 6) 「五色題評餘稿本」(第29葉右～第35葉左)

第35葉左に「丙子秋八月三日稿 玄同陳人批評」の14文字有り。

第2冊『惜字雜箋 坤』

## 1) 「與畑勘解由書」(第1葉右～第7葉左)

「瀧澤文庫」の長方朱印の押捺有り。

第1葉左に「癸酉仲春 簑笠陳人解識」と有る。第7葉左に「癸酉春二月十五日 江戸 瀧澤解再拜」と有る。

## 2) 「報畑勘解由書來翰附録」(第8葉右～第14葉右)

漢字文に訓点が附されている。

第11葉右に「壬申秋八月 平安畑雞龍再拜」・「呈 瀧澤君馬琴足下」・「解再拜 鶴山畑先生 足下」・「癸酉春正月 荏土瀧澤解再拜」・「報鶴山畑先生足下」等の記述有り。

## 3) 「改過筆記」(第15葉右～第31葉左)

漢字仮名混り文。漢字には訓点と割注が附されている。

## 4) 「越後國古志郡二十村牛一角突」(第32葉右～第43葉左)

漢字仮名混り文。

第3冊『惜字雜箋 春』

## 1) 「蛇田乃以しふみ人 完」(第1葉右～第9葉右)

漢字仮名混り文。「曲亭文庫」の長方朱印の押捺有り。

第9葉右に「文化壬申季夏□七 簑笠漁隱」の文字有り。

## 2) 「星と気の篆」(第10葉右～第14右)

漢字文に返り点・送り仮名・句点が朱で附されている。

「仁徳五十五年丁卯夷賊冠我境」という文字有り。

## 3) 「高遺墓」(第14葉左～第16葉左)

「貞觀五年五月」の文字有り。

漢字文に返り点・送り仮名及び、片仮名でルビが附されている。

第16葉左に「簑笠瀧澤解識」の6文字有り。

## 4) 「三代実録 卷十四」(第17葉右～第18葉右)

漢字文に朱の読点有り。又、漢字仮名混り文の部分の文字は細小である。

(8)

第18葉右に、「壬申夏六月念八日、以風雨故終日坐于暗室 / 且倚硯於紙窓下、更識之訖 瀧澤解」とある。

5) 「能樂考」(第19葉右～第25葉左)

漢字平仮名・片仮名混り文。

6) 漢字文 (第26葉右～第27葉左)

墨の句点有り。

「亀田長梓再拜」・「曲亭瀧澤老翁惟下」の文字有り。

7) 「流行商人繪詞 / 廿三番狂歌合并ニ附録 / 著作堂主人□□」(□□は署名か) (第28葉右～第52葉右)

第52葉右に「文政己丑年暑節担月上澣也 / 著作堂老禿」の記述有り。

8) 「大野木市兵衛開鐫 / 浪速廬橘庵撰 / 劇場画史 / 画賛三十有七篇 / 江戸著作堂馬琴作」(第61葉右～第80葉左)

第4冊『惜字雜箋 夏』

1) 「騁鞭 完」(第1葉右～第1葉左)

2) 「流轉數回阿古義物語 卷之一」(第2葉左～第29葉左)

3) 「おかめ八目 全」(第50葉右～第66葉右)

第66葉右に「癸酉□九月十三日」と有る。

第5冊『惜字雜箋 秋』

1) 「皇宋類苑日本僧寂照」(第1葉右～第4葉右)

2) 「譙周法訓 蜀譙周」(第6葉右～第11葉左)

3) 「下野州都賀郡葛生村浅間社頭奇洞紀古文」(第12右～第16葉右)

第16葉右に「天保四年癸巳九月十日 著作堂主人」とある。

4) 「續安齋叢書」(第17葉右～第20葉右)

5) 「著作堂俳書目録」(第22葉右～第28葉右)

6) 「近聞播民紀事」(第29葉右～第37葉右)

第29葉右に「天保四年秋」とある。

第6冊『惜字雜箋 冬』

1) 「陸謙画莫(模) 本水滸百八人像賛」(第1葉右～第7葉左)

2) 「西遊記抄録 全」(第9葉右～第48葉右)

3) 「好迷傳脚色抄」(第50葉右～第80葉左)

4) 「空言八百三蟲傳序」(第81葉右～第82葉左)

漢字のみ。墨書きの句点有り。

「天保戊戌晩夏」・「黙老樵者謾題」の文字有り。

(3) 『玉照堂遺愛字紙』 上下 (2冊)

著作道主人解 (集)

天保7年(1836)の跋文有り。

次に同じく馬琴の貼込みである『玉照堂遺愛字紙』についてその内容をあげておく。

『玉照堂遺愛字紙』 上下2巻

この卷子本2巻も、貼込み者は馬琴であり、作られたのは、天保7年(1836)跋があるので此の年かと考える。宗伯の没した翌年ということでもある。

形態は卷子本であり、各巻箱入りである。

その寸法は、上巻：16.0×48.4—131.0×27.5cm (外寸33.5×1292.0cm)、下巻7.7×12.5—102.1×30.8cm (外寸33.7×1044.7cm) である。

早稲田大学図書館の注記に依れば、

一部朱書

虫損あり付箋ありはり込あり

卷子装

印記：藤、家、江芸閣印、発陵郡人、源定常印、君倫、美意延年、長命主人、善修、信敏之印、竹目、藤原 [エイ] 印、通齋、解、東条耕印、子臧氏、仲弟愚人、琴台、房且、子陽、早川欽印、字曰子肅、不動如山、蘭明、観道、豊翠、琴籟

印記：滝沢文庫

滝沢馬琴旧蔵

とある。

上巻：

- 1) 花山院家厚書 (家厚) の署名有り
- 2) 江芸閣書 (「玄同」江芸写) の署名有り
- 3) 蓑笠瀧□澤翁正 / □□ という識語有り
- 4) 書 (文政丙戌孟冬應 / 瀧澤宗伯氏需 / 冠山松平定常書) という識語有り
- 5) 書 (「岡本花亭翁誕辰□余同月日□嚮寄詩余唱和今月生日賦此即

(10)

寄 常]) という識語有り

6) 書 (「明月拂清風」文化八/□會□□/百十八□□) という識語有り

7) 書 (八□堂信敏の署名有り、松平信敏歳筆)

8) 答文画 (朱の手形と文二の二文字有り)

9) 書享保十三戊申中春

10) 書

11) 書 (上部藍色、下部茶系色)

12) 書 (「曲亭」□知の文字有り。2月8日付と正月25日付の手紙2通)  
早稲田大学図書館の説明によると、曲亭馬琴宛書状 (2枚2月8日付)、  
花山院家雑掌添状 (梅戸石見守→山原七左衛門正月25日付) とある。

13) 書 (一休書：琴嶺影写)

14) 書 (加藤千蔭法帖4枚)

卷末に

此書數幅古兎 (又は思) 奉頻遺愛也容

歳秋月罔遺□□□之□令裱□

以為一軸

天保七年秋八月 著作堂主人解

□□ (朱印)

と記されている。

下巻：

1) 書 (「瀧澤翁七十壽」「晋臺居士東條耕)」という識語あり。絹本墨書

2) 書 (「祝 蓑笠翁古稀賀)」との標題有り

3) 書 (醉贈著作艾郎<標題>、潜蓬舎/司馬欽の記述有り)

4) 書 (蘭明?)

5) 書 (暈翠閑人) という署名有り

6) 短冊 (賀瀧澤翁古稀短冊8枚、彩色模様のもの6枚、長方形の紙片のもの2枚あり)

7) 書 (豊保の署名有り)

8) 書 (寒中見舞雛形)

9) 書 (同上)

- 10) 書 (同上)
- 11) 書 (参府状雛形)
- 12) 書 (加判札状雛形)
- 13) 書 (帰国状雛形)
- 14) 書 (琴嶺瀧澤興継の署名有り、九月十三 (日の字無し) の文字有り。56文字の漢字手習い有り)
- 15) 書 (瀧澤家の家族の手紙)
- 16) 書 ( 同上 )
- 17) 書 ( 同上 )
- 18) 書 ( 同上 )
- 19) 書 (さきの手習いのような手紙)
- 20) 書 (瀧澤家の家族の手紙)
- 21) 鎮五郎の手紙 (?)
- 22) 鎮五郎の図画一部分
- 23) 拓本 (瀧澤宗伯墓誌、天保6年) の紀年有り

以上が、馬琴の3種類の「貼込み」の全容である。これらは、全て、早稲田大学図書館の所蔵である。

以上が、馬琴自ら制作した三点である。但し、『敬惜字紙小成』は、新たに馬琴が創作したものではなく、彼がすでに所蔵していた「字紙」(部分・断片等)を貼込んで出来上った「作品」ということになる。そこで、筆者は、この貼込という行為が、当時中国本土で行なわれていた「敬惜字紙」行為とは異なるもう一つの「敬惜字紙」と考えたいのである。がしかし、現時点において、馬琴の三点以外では、まだその例としてあげることのできるものは、先にあげた森島中良の『惜字帖』と、筆者が美術商のカタログ上で見た、富岡鉄斎両双幅「敬惜字紙」だけである。

この富岡鉄斎双幅「敬惜字紙」は、カタログ説明に依ると、紙本・台紙の大きさ137×40cm、鉄斎記録紙10枚貼込。鉄斎共箱・富岡鉄斎が東遊の折、石川三碧と歓談してその間に答え筆記したものを石川が表装し、鉄斎に箱書「大正12年成」を求めたもの。題字・跋の他、玉堂琴譜のこと、鉄斎の短歌も有る)とのことである。

### 3) 黄苗子著『敬惜字紙』について

2) の日本の敬惜字紙で触れた森島中良・瀧澤馬琴・富岡鉄斎の表現した「敬惜字紙」—『惜字帖』・『敬惜字紙小成』・『惜字雜箋』・『玉照堂遺愛字紙』—の持っていた意味合いが、「集積・集成」から、己の表現である「著作・メモ」だけではなくあらゆる対象物を「ファイル」するということへと「進化」していくその結果として存在しているということができると考えている。

そこで、中国において同様の考えと思われる黄苗子著『敬惜字紙』を紹介したいと思う。

黄苗子は、1913年9月30日、広東省中山市に生まれ、小学・中学時代は、香港で教育を受け、19歳の時、父親に随って上海に到り、政府の職員と為り、同時に文藝編集及び漫画創作を行うことと為った。

抗日戦争の時には、広東・香港・重慶を転々とし、戦争終結後は、南京・上海へ行き、官に就いた。

1949年、北京へ到り、華北人民革命大学政治研究院へ進み、中国美術史を研究し、1950年以降は、中国美術史関係の研究に従事し、その著作も多い。

文化大革命の折には、捕らえられ、投獄されたが、出獄以降は書道創作へ転じ、1981年以来数度にわたり、日本を訪れ書道界とも交流がある。

以上のような経歴・業績を残し、2011年1月8日、北京で死去している。彼の著作には、散文集・詩集・美術論集・書画集などにわたり多くのものがある。

この散文集の中に、ここで紹介する『敬惜字紙』がある。本書には、作者による序文・自序には、1985年1月という紀年がある。出版は、1986年12月、寧夏人民出版社からである。

その構成を本書の目次を用いて紹介する。

自序に続いて、千字文目録・牛山集目録となっており、続いて、「江青講史」・「画家的互相推重」・「説猴一作于猴年」・「從化春早一給廖冰兄的信」・「正言若反」・「夢中佳酒」・「黄葉葉」・「『北齊書』抄」・「説“曲折”」・「読『北征』」・「『長恨歌』和『胡旋女』」・「偷閑小札—関于魯迅先生在古文方面的成就」・「女排對話」・「画個圈兒替」・「歪与不正」・「生与死」・「『北齊書』再抄」・「看戲余想」・「東飛伯勞西飛燕」・「多」・「読『新鳳霞回憶

録』・「燕啄春泥頌」・「広州」・「説真話」・「笑」・「猪雑説」・「飛揚・响亮・向前」・「公文小議」・「盧光照画記」・「頌白袍小将」・「媽媽閑学」・「縁一悼念成蔭同志」・「人体応用学与人体病理学」・「床虱」・「遺囑」となる。ここまでが全115頁の『千字文』全文である。

次いで、『牛山集』も同様に記すこととする。

「小引」では、『聊斎志異』に、牛首山の僧が40首の詩を作ったが、それを見た者に絶倒せざる者なしであった。と、ある人がこの僧のために詩を印刷し、「牛山四十屁」と命名したということが載っているということで、この書名が「妙想天開」であるとうれしく思い、この書名にしたということが、記されている。続いて、「江神子一題『四蟹図』」・「題它山漫画冊子」・「題永玉水仙冊子」・「丁巳清明、同鐘靜老丙辰之作」・「鷓鴣天一題吳双七歳所作小丑」・「南郷子一題正宇画肖長華『閑松林』劇；一題郁風画挿孟折枝花二首」・「一半兒一題韓羽画竇爾敦；一黃山雜詩十一首；一題画梟」・「玉楼春一題『関公戰秦琼図』；一丁巳秋日同任俠安治二兄游香山、翌日安治兄以詩見寄、因步原韵」・「卜算子一題『蘇三起解図』；一為大象題所蔵凶図；一題『富春図』；一富陽小景；一題岭雲画翟塘峡凶卷1978年2月」・「漁家傲一題『十五貫図』；一題清天寿花卉卷二首；一題『長江万里図』；一老舎先生挽詩」・「鷓鴣天一『双蛙図』、稚柳夫人陳佩秋為啓元公絵。元公自題南郷子一首、并識云：“補与謝兄稚柳、鼓腹而嬉、有双蛙之目。謝嫂陳夫人為作此図。”戲為小令求正」・「丑奴兒一題『孫悟空与白骨精図』；一題富春山居小景；一別一幅；一政協礼堂春節茶話会12点；一題傳大窓所拓『唐瑠玉集』；一聞散翁喜訊、并云癸還翁所作法書。使加装裱、可与二王并伝、因戲為一絶寄之」・「菩薩蛮一題『断橋相会図』；一題趙丹白楊合作『紅樓夢菊花詩図冊』・念奴嬌一沈行兄懷念其師傅抱石、以所作悼詞、匯為一卷、名曰『悼師集』。属為題之；一戲題秦鷓鴣紋瓦当拓本」・「生查子一題孫悟空大戰金錢豹画」・「南郷子一題朱竹、賀重禹結褵」・「沁園春一題尹瘦石旧作『柳車子先生漓江祝嘏図像』；一題『鐘馗夜帰図』 図作鍾馗大醉一少婦挾掖之；一庚申春節、吳老邀宴広州北園、以詩留別；周汝昌兄赴美参加紅樓夢研討会、帰途経香港、邂逅土瓜湾。汝昌索詩、戲為一絶」・「江城子一北戴河阻雨；一題查声山所書手卷二絶；一趙丹遺囑、不許朋友哭他。然而総不能笑。哭笑不得祭之以詩；一觀胡芝風演李慧娘；一題漢二十四字吉語磚拓本」・「浣

(14)

溪紗一題『天同樓図』；一悼李景波；一題張髯翁新作荷花立軸；一題関良所作戯劇人物卷・「浣溪沙一題宋文治所藏潘天寿水墨・陳佩秋工筆牡丹蛺蝶合卷」・「玉樓春一題清天壽陸儼少蔭山閣看雲書畫合卷；一題朱圻老梅花草堂；一辛亥革命七十周年紀年放歌；一游魚鱗峽、地在青島嶗山；一寄懷于霜葉；一青島与慰冀兄看海；一題葉翁四季花長卷；一誦三草；一題髯翁『烏石游魚図』」・「西江月一題『醉鍾馗図』；一題乙藜先生所藏龔定庵跋唐臨晋本黃庭經；一題『東城讀書図』；一放歌題永玉白描玉簪花大卷；一韓羽画戯、漫題一絶；一千島湖記游詩：淳安・重九登桂花山・羨山・石虎・蜜山」・「菩薩蛮一題『寒山詩意図』；一渴死偈二章、題『三個和尚図』」・「卜算子一啼鶯；一擬集成語為詩、忽接羊公佳什。糊里糊涂、湊成一律；一李清照誕生六百周年漫成一絶；一集白石老人句為二絶、紀念老人一百二十周年誕辰；一題傅青主『聽書図』、図為韓羽所作、已五六年矣、并時諸老題詩甚衆、予為読貂；一題白石老人夢卜小頁；一訪散宜翁；一題丁聰漫画二首：張賢亮像・楊憲益像」・「菩薩蛮一題不倒翁図；一題葉聖老旧作刊本二首；一保護稀有活人歌、戯為元公作」とある。こままで全151頁の『牛山集』全文である。

さて、これもやはり、中良や馬琴の「貼込み帖」同様、黄苗子の作品を、その一部分ではあるが、元の掲載物を手にすることが出来なくても集大成記録として利用する上に便利であると共に、「千字文」の如く、読書各人の手元では失なわれ易かったり、失なわれてしまったりしたものを再度眼にすることが出来るということでは、備忘録的、記録帖的価値を有すると思う。

しかし、この作者黄苗子は「敬惜字紙」という命名をした理由をその自序に絵図入りで紹介している。その最後4行に、「書名は元々は『待焚集』としようと考えていたが、偶然、武華君氏が私を題材とした漫画『敬惜字紙』を新聞紙上に載せているの見たことにより、大変趣きのあることと思い、『敬惜字紙』を書名とした。」とある。

黄苗子も亦、「敬惜字紙」ということについて十分な知識があったことが判るであろう。

#### 4) おわりに

中国において、文字を創始したとされる倉頡・文字そのもの自体・文

字の記された紙等に対する尊崇観念から始まった「敬惜字紙」（文字の記された紙・布・陶器・木片等がその対象となるのではあるが、その数の最も多いのが紙であろう）について考えることから始まった「敬惜字紙」研究であり、それも未だ半ばまでも到らず、将に「始まったばかり」の域を出ることが出来ていないという有様である。

「はじめに」でも述べたように、筆者が「敬惜字紙」という四文字に出遭ったのは前世紀末頃より今世紀初頃、中国北京の古旧書市場で、清代後半から民国初めの頃に印刷された木版本及び石印本の勸善書を購入したあたりのことである。

また、丁柔克（1840- ?）撰『柳弧』巻1に、「惜字」・「惜穀」・「惜福」、巻3に「敬惜字紙」という記事を見つけたが、この「敬惜字紙」の項に記されている内容からは、勿論、字紙を敬惜すべしということが記されてはいるが、善書等にあるような教訓的因果応報論が展開されてはいなかったのである。

同様に、明の郎瑛撰『七修類稿』にも、梓潼神が「敬惜字紙」を勧めたということと、宋の王沂公が状元及第した理由に、その父が「字紙が捨てられ落ちているところに相遇した時には、それを拾い集めて“香湯”を用いて洗い、その後焚焼（その後川もしくは海に流したという記事は無い）したところ、その夜夢で“字紙”を“敬惜”したことへの応報として、曾參を生まれさせよう、又一家を繁栄させようということが明らかにされ、しばらくすると、果たして男の子が生まれたので、名前を曾としたところ、後に状元に及第した。」ということが載せられているのであった。

また、『竈君明君』（表紙：洱源縣明善壇藏版、後學張大勳恭録、重刊竈君明訓原叙には巻末に「光緒二十七年歲在辛丑季春月上澣吉旦陽瓜後學杜漣謹識并書」とあり、次いで、竈君明訓原序には、巻末に「道光庚子年仲夏月定遠縣廩生吳印川謹識」とある。民国庚申<1920年>翻刻）には、第7章に「敬惜字紙」（第20葉右～第22葉右）の章が置かれており、第5章愛惜生命には、「刻善書」・「敬惜字紙」・「淫書」の語が見える（第18葉右）。

1942年（昭和17年）5月5日中央公論社発行の佐久間東山著『燕臺識餘』書道の項（頁86-92）には、『太平広記』を引用して、僧智永・懷素・張芝の例をあげ、

「如何に支那では古來から書を學ぶに、全力を傾注したかが想像されるのである。其上に、書は心の表現、人格の發露として支那人が恣<sup>イ</sup>に<sup>カ</sup>に認真に書を貴ぶかは、苟も文字の記された紙屑さへ見れば、必ず之を電柱其他隨處に吊された「敬惜字紙」と認めてある籠や、盛り場に好くある「惜字塔」と名ける大きな香爐に投げ入れて、決して之を粗末に扱はぬことは、其文字に對する親みと理解とに於て遙かに日本と異つて居る。」(頁88・8行目～頁89・4行目、点・ルビはいずれも著者の附されたもの)

とある。

別に、1943年(昭和18年)6月1日大阪屋號書店発行の高木健夫著『北京横丁』(頁407～409)にも「敬惜字紙」についての記述があるが、これは、この書の前書きに述べられている通り、昭和15年(1940)7月から昭和16年(1941)秋までの間に、『東亞新報』夕刊紙上に掲載された記事であるということからも、時間を限定出来るという利点がある。以上のような記載にある「敬惜字紙」は、本来のというべきか、字紙、つまり文字の記された紙に対しての畏敬念を持ち、その字紙対して信仰的習俗的対応をし、拾蒐・洗浄・乾燥・焚焼・灰の放流を実行することにより、応報が生ずるというものである。

しかし、今回本稿で扱った森島中良の『惜字帖』や瀧澤馬琴の『敬惜字紙小成』・『惜字雜箋』・『玉照堂遺愛字紙』、書店目録上で看見しただけではあるが富岡鉄齋の双幅『敬惜字紙』の五点はまさに「字紙」の貼込みであり、同様に、中国で出版された、黄苗子著『敬惜字紙』のように小作品を集成したものも、やはり、各作品を「貼込んだ」という解釈が成り立つと考える。これも含めて、「もう一つの敬惜字紙」ということが出来るであろう。勿論、どちらの敬惜字紙もその底に流れる「字紙」を「敬惜」「遺愛」「愛惜」という考え方に違いはないのではあるが……。

遣隨使・遣唐使以来、中国の文化(政治体制・法律・宗教・思想・本草・書籍等々)は日本へ伝来し、そのまま定着したり、変容を生じた上で定着した。その後、宋代から清代に至るも同様である。森島の『惜字帖』に貼り込まれている「商標」からも、その交易内容が幅広く、限られた一地域からのものではないこと、日本側から見ても、

長崎や堺という入港の地だけではなく、遠く江戸の地においてその中国文化の香りを、幕府所在の地だからというだけでなく、雰々と庶民（中国風というと知識人階層を今少し幅を上げた部分ということが出来るのであろうが）社会の中に、ただよわせていたということである。

特に『惜字帖』に貼込まれている「オーランウータン」の彩色画などは、その最たるものと言えるのではないだろうか。

筆者は、中国に於ける「敬惜字紙」について勸善書から興味を持ち、資料を蒐集することから始め、その中で、文昌帝君信仰・科挙及第への関連付けを認識し、清代後半期、中国各地で頻繁に実施されていく、宣教師主導の福祉・教育活動の一環としての〈惜字会〉の成立とその活動、又、形骸化したとはいえ現在も民間習俗行事として実施されている台湾の敬惜字紙等々について考え、「中国」に於ける「敬惜字紙」のもつ意味を把握するに至った。

そして、本稿の「もう一つの敬惜字紙」について、日本に於いて、中国の「文化」を貪欲に吸収していた江戸時代、つまり「支那趣味」を有つことを一つのステイタスとさえ考えていた江戸時代の文人達の中にも、中国からの他の有形無形の伝来文化の需要同様に、この「敬惜字紙」という考え方が輸入されていたであろうと考えたのである。

森島の『惜字帖』や馬琴の『敬惜字紙小成』・『惜字雜箋』・『玉照堂遺愛字紙』等で行なわれている「貼込み」という、日本に於いては一般的なことに対して、わざわざ「惜字帖」・「敬惜字紙」・「遺愛字紙」などという名称を附すこと自体、「支那趣味」つまり、中国の文化・習俗に彼等がどっぷり漬かっていたという証拠であるともいえるであろう。

さて、もう一つ、1900年偶然のことから、王円録という人物に発見されることとなった敦煌遺書がある。この敦煌遺書とは、現在の甘肃省敦煌市にある莫高窟千仏洞第17号窟に封蔵されていた、4世紀初めから11世紀初めの間に書写された文書や文字の記され、刻されている絹画・幡・仏具・図像の類をいうのであるが、この敦煌遺書は英国・仏国・中国・露国・日本を含む世界各地にその所在が分散してしまっているのである。今ここでこの敦煌遺書を取りあげたのは、この文書類がどのような理由のもとに、あの一室に封蔵されたのかということと「敬惜字紙」という、中国において、古から生活の上での一つの規範でもあった「敬惜字紙」

(18)

がこの封蔵理由の有効な一つではないかと考えられているからである。勿論発見から110年以上を経た今日でも、その理由が確定していないのが現況であるが、この説を唱える研究者達が、中国に於ける「惜字」「惜字紙」ということについて、知識と認識を有しているということも付け加えたいと思う。台湾に於いては、先にも触れたように、現在も老幼男女が「敬惜字紙」ということに対しての有知識・有認識が維持されているが、大陸に於いてのそれは、一部の研究者やすでに少なくなりつつある老年世代となってしまうのが現状である。今世紀に入ってから、残存している惜字炉をインターネットで紹介したりしている場合もあるが、約14億人の国民からはほんの一握り、もしくは、ほんの一つまみということでしかないのは、仕方のない事実であろう。

文化の伝承というのは、その政治体制の変化や経済・社会状況の変化ということによって困難さが増すものであるが、文字・紙・字紙を扱う立場にある者の一人として、その「敬惜」「遺愛」「愛惜」を表現する方法が、信仰的であろうと備忘録・記念録の貼込みであろうと残しておきたいと切に願うものである。いずれにしても、10年間の文化大革命の残した「傷跡」は深く広くそして、取り返しのつかない面が、当時想像していた以上に大きいものであると、あらためて思う次第である。

##### 5) 参考文献一覧

- 01) 『中国古代小説与民間宗教及帮会之関係研究』(万晴川著 人民文学出版社 2010年)
- 02) 『書籍の社会史—中華帝国晩期の書籍与士人文化』(周紹明 (Joseph P.Mc Dermott) 著・何朝暉訳 北京大学出版社 2009年)
- 03) 『北京宗教史』(鄭永華著 人民出版社 2011年)
- 04) 『中国近世民間信仰—宋元明清』(王見川・皮慶生著 上海人民出版社 2010年)
- 05) 『老北京的風情』(常人春著 北京出版社 2001年)
- 06) 『清前期社会教化研究』(王有英著 上海人民出版社 2009年)
- 07) 『文昌信仰習俗研究』(高梧著 巴蜀書社 2008年)
- 08) 『翰墨英風—文昌帝君与閔聖帝君』(劉海燕著 宗教文化出版社 2006年)
- 09) 『中華文昌文化—国際文昌學術研究論文集』(王興平・黄枝生・耿薫編

巴蜀書社 2004年)

- 10) 『印光法師文鈔統編』(印光法師 宗教文化出版社 2004年)
- 11) 『台灣的敬字亭』(張志遠著 遠足文化事業股份有限公司 2006年)
- 12) 『道教と神話伝説—中国の民間信仰—』(橘樸遺著・中野江漢編註 改造社 1948年)
- 13) 『北京繁昌記』(中野江漢著・中野達編 東方書店 1993年)
- 14) 『点石齋画報・大可堂版』(上海画報出版社 2001年)
- 15) 『点石齋画報』(天津古籍出版社輯 天津古籍出版社 2009年)
- 16) 『秋霜五十年—台湾・東京・北京・沖繩—』(郭承敏著 沖繩文庫 2010年)
- 17) 「惜字律二種」(辛德勇著 『中国典籍与文化』2000年第4期収載)
- 18) 「論海峡兩岸一脉相承的敬字信仰：以福建客家地区為例」(俞如先著 『龍岩学院学報』2008年5月収載)
- 19) 「敬惜字紙的習俗及其文化意義」(孫榮來著 『民俗研究』2006年第2期収載)
- 20) 「豐城仏教居士林設立惜字會」(陳湖山著 『護生報』第82期第6版 民國24年9月収載)
- 21) 「信仏惜字火却不侵」(陳文政著 『護生報觀音專刊行』第45期第4版 民國25年3月収載)
- 22) 「中国民間信仰中的梓潼神」(景志明・張澤洪著 『中国俗文化研究』第4輯 2007年 巴蜀書社収載)
- 23) 「梓潼文昌帝君靈応故事輯考」(蔣宗福著 『中国俗文化研究』第4輯 2007年 巴蜀書社収載)
- 24) 「敬惜字紙信仰論」(楊梅著 『四川大学学報』哲社版 2007年第6期収載)
- 25) 「論道教善書的当代價值」(段玉明著 『宗教学研究』2006年第3期収載)